

番	と		み	は	今	ら	と		目	れ	い	紙	込	な	い	ず			不
才	い	紡	れ	な	日	こ	も	紡	か	く	の	の	み	ど	合	窓			思
も	う	木	ば	い	に	う	五	木	の	ら	歌	端	ひ	そ	っ	の			議
思	作	の	い	そ	至	し	回	か	方	い	の	た	た	こ	た	外			な
っ	業	言	い	う	る	て	の	ら	に	い	』	す	そ	に	時	を			滝
て	に	つ	い	で	ま	利	晩	紙	横	う	』	ら	こ	な	と	眺			
い	は	て	じ	、	で	他	を	と	書	い	と	に	い	い	同	め			
た	そ	い	ゃ	名	一	の	過	鉛	き	う	い	か	か	じ	て	い			
。	れ	た	な	取	度	様	し	筆	で	文	う	の	よ	よ	い	。			
今	ほ	通	い	は	も	子	た	を	丁	字	う	う	に	う	。				
ま	ど	り	か	一	利	を	。	眺	寧	だ	う	に	自	。					
で	時	、	。	心	他	め	心	に	に	け	。	分	分	初					
目	間	こ	。	配	の	に	配	な	書	取	。	の	の	め					
を	は	の	。	な	顔	来	な	ら	か	っ	。	世	世	て					
背	か	所	。	直	が	て	り	接	か	て	。	界	に	こ					
け	か	謂	。	接	晴	い	昨	聞	か	。	。	入	入	う					
続	か	“	。	聞	れ	る	日	い	少	。	。	。	。	し					
け	ら	作	。	い	る	こ	か	。	な	。	。	。	。	て					
て	な	詞	。	て	と	。		。	く	。	。	。	。	向					
き	い	”	。	。										か					

た	こ	と	で	も	あ	る	し	、	き	つ	と	書	き	た	い	こ	と	や	そ
れ	こ	そ	償	い	た	い	こ	と	は	堰	を	切	つ	た	よ	う	に	溢	れ
出	て	く	る	だ	ろ	う	と	。	だ	が	現	実	は	そ	う	で	は	な	い
ら	し	く	、	利	他	の	筆	は	一	向	に	進	む	気	配	を	見	せ	な
い	。																		
こ	こ	ま	で	き	て	し	ま	う	と	、	番	才	の	心	の	奥	深	く	
に	沈	殿	し	て	い	た	へ	ひ	よ	つ	と	し	た	ら	、	“	償	い	を
す	る	”	と	い	う	こ	れ	ま	で	の	行	為	は	、	ま	た	こ	う	し
て	時	間	を	稼	ぐ	た	め	の	口	実	だ	つ	た	の	で	は	？	”	と
い	う	思	い	が	浮	上	し	て	き	て	し	ま	う	。	居	て	も	立	つ
て	も	居	ら	れ	な	く	な	つ	た	番	才	は	再	度	小	さ	い	溜	息
を	つ	き	、	意	を	決	し	て	利	他	に	話	し	か	け	た	。		
	「	な	か	な	か	、	筆	は	進	み	ま	せ	ん	か	？	」			
利	他	の	目	線	が	窓	の	外	と	話	し	か	け	た	番	才	と	の	中
間	ま	で	動	き	止	ま	る	。	声	は	届	い	て	い	る	と	わ	か	っ
た	番	才	は	利	他	の	返	答	を	待	つ	た	。						
「	。	。	。	う	ん	」													
そ	の	ま	ま	次	の	言	葉	が	生	ま	れ	る	気	配	は	な	い	。	
「	や	は	り	、	償	い	と	な	る	と	些	か	テ	ー	マ	が	大	き	い
の	で	す	か	？	そ	れ	と	も	、	償	い	た	い	こ	と	が	多	過	ぎ

て	こ	れ	だ	と	い	う	も	の	に	絞	れ	な	い	と	か	。
「	う	ん	。	そ	れ	も	。	。	あ	る	か	な	。	」		
す	ぐ	に	ま	た	求	め	て	い	な	い	沈	黙	が	や	っ	て
「	。	。	。	利	他	さ	ん	が	想	っ	た	こ	と	を	、	そ
ま	素	直	に	言	葉	に	す	れ	ば	よ	い	の	で	は	な	い
か	？	作	詞	な	ど	し	た	こ	と	も	な	い	素	人	の	意
し	訳	あ	り	ま	せ	ん	が	、	そ	ん	な	に	容	易	い	こ
な	い	の	で	し	ょ	う	か	？	」							
そ	の	言	葉	を	聞	い	た	利	他	の	目	が	少	し	大	き
か	れ	る	。	番	才	は	す	ぐ	さ	ま	自	分	へ	の	反	省
と	移	行	し	か	け	て	い	た	が	、	そ	れ	に	気	づ	き
世	界	へ	入	る	こ	と	を	ぐ	つ	と	堪	え	反	応	を	待
「	そ	ん	な	に	難	し	い	こ	と	で	は	な	い	で	す	。
た	い	こ	と	を	自	分	の	言	葉	で	、	自	分	の	表	現
ば	そ	れ	が	詞	に	な	り	ま	す	。	」					
番	才	は	腹	の	底	か	ら	飛	び	出	そ	う	に	な	る	言
の	筋	肉	で	口	内	に	留	め	さ	せ	る	。				
「	書	こ	う	と	思	う	と	次	々	に	湧	き	起	こ	っ	て
ん	で	す	。	言	葉	が	滝	の	よ	う	に	溢	れ	て	、	こ
き	さ	の	紙	じ	ゃ	足	り	な	く	な	る	く	ら	い	に	。

乗	ま		い	番	え	け	ん	わ	こ	う	「	な		を	そ	「	「	「	「	「
っ	る	書	う	才	た	に	。こ	る	れ	と	そ	い		足	の	。そ	な	な	な	な
て	で	き	現	は	ら	な	こ	そ	は	う	う	か		し	利	。全	。客	。事	。理	。理
全	自	た	実	ま	・	つ	れ	れ	主	そ	う	ら		た	他	部	観	実	解	解
身	分	く	を	た	・	つ	た	ま	観	ま	で	・		た	の	主	的	を	、	番
を	の	て	ぶ	も	何	け	気	で	で	で	の	と		受	言	観	に	、	才	は
巡	思	も	つ	自	も	な	し	客	全	出	出	い		け	理	な	、	は	理	解
る	考	書	け	分	書	く	観	く	来	来	こ		ど	由	ん	事	解	と	誤	
。そ	の	け	ら	に	け	な	う	視	問	事	事	と		、	を	で	は	誤	と	誤
れ	よ	い	れ	で	な	っ	が	で	題	が	は	す		事	、	き	と	と	と	と
と	う	い	た	可	な	ち	し	き	い	客	確	か		実	番	て	い	い	い	い
同	に	う	だ	し	な	ゃ	て	い	。け	観	か	に		を	才	ま	ま	ま	ま	ま
時	に	利	っ	何	な	っ	。そ	ま	ど	視	起	起		取	は	書	け	け	け	け
に	（	他	た	も	な	っ	う	せ	、	で	り	り		っ	理	け	ば	ば	ば	ば
こ	こ	の	っ	な	い	っ	考	い	そ	き	ま	ま		た	解	！	！	！	！	！
の	の	心	た	い	と	っ	。こ	ま	こ	い	し	し		。こ	と	？	？	？	？	？
問	問	情	。こ	と	と	っ	こ	こ	こ	ま	ま			こ	と	？	？	？	？	？
題	題	が	。こ	と	と	っ	こ	こ	こ	ま	ま			こ	と	？	？	？	？	？

カ	カ	か	二	女	ち	「	ま	同	番	い	た	「	口	響	し	「	光	行	の
ウ	ウ	け	人	将	よ	利	た	じ	才	ん	ん	そ	へ	き	ん	や	が	き	解
ン	ン	る	に	は	っ	他	も	よ	は	じ	の	の	と	、	と	ふ	当	決	
タ	タ	利	名	食	と	。あ	揃	う	自	ゃ	分	反	視	番	静	つ	た	策	
ー	ー	他	取	堂	紙	ん	っ	な	分	な	応	線	才	まり	と	そ	は	は	
を	を	に	が	を	と	た	て	顔	の	い	を	を	と	か	の	火	い	な	
通	通	番	「	後	着	に	視	で	心	か	見	注	揃	え	を	は	い	か	
り	り	才	ほ	に	い	し	線	こ	当	？	る	い	っ	っ	絶	な	い	か	
越	越	は	ら	、	お	、	を	ち	たり	”	に	て	た	た	や	い	な	い	
し	し	着	、	呆	い	然	女	ら	を	こ	、	食	み	み	し	た	い	か	
表	表	い	そ	と	で	と	将	を	利	の	堂	た	た	た	た	い	い	か	
へ	へ	っ	の	そ	！	そ	へ	見	他	問	に	に	だ	だ	だ	だ	い	か	
と	と	っ	場	の	と	場	と	る	へ	題	解	に	だ	だ	だ	い	い	か	
出	出	っ	に	居	声	に	戻	利	と	に	決	入	だ	だ	だ	い	い	か	
て	て	っ	居	残	を	に	し	他	目	に	策	入	だ	だ	だ	い	い	か	
行	行	っ	残	る	だ	に	た	と	が	に	は	入	だ	だ	だ	い	い	か	
く	く	っ	る		だ	に	よ	目	合	に	な	入	だ	だ	だ	い	い	か	
女	女	っ			だ	に	よ	合	い	に	な	入	だ	だ	だ	い	い	か	
将	将	っ			だ	に	よ	い	と	に	な	入	だ	だ	だ	い	い	か	

「はい。」	ち	「	き	女	が	女	も	ん	「	謝	「	「	「	で	追	壁	ざ	の
	に	け	て	将	理	將	し	た	長	ら	贈	は	歩	い	い	に	わ	後
	で	ど	い	の	解	は	な	が	い	な	り	行	付	壁	つ	ろ	姿	
	可	ね	な	行	で	頭	か	が	え	き	物	き	き	に	く	に	に	
	能		い	動	き	を	っ	あ	っ	を	を	を	き	、	、	、	、	
	な	、	。°	を	ず	制	た	あ	、	す	す	止	い	、	、	、	、	
	し	番		制	「	す	こ	っ	い	振	め	、	と	、	、	、	、	
	た	才		す	あ	素	と	わ	な	り	た	女	、	、	、	、	、	
	。	の		素	っ	振	わ	か	な	を	は	將	、	、	、	、	、	
	。	お		振	、	を	つ	っ	な	見	わ	は	、	、	、	、	、	
	。	陰		を	い	せ	て	い	な	せ	た	は	、	、	、	、	、	
	。	で		る	な	る	い	な	が	こ	し	、	、	、	、	、	、	
	。	よ		こ	と	し	が	ら	、	と	か	、	、	、	、	、	、	
	。	う		と	し	か	あ	何	。	し	、	、	、	、	、	、	、	
	。	やく		し	か	で	、	。	。	か	、	、	、	、	、	、	、	
	。	わた		か	で	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。
	。	した		。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。
	。	た		。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。
	。	した		。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。
	。	。		。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。
	。	。		。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。
	。	。		。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。
	。	。		。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。
	。	。		。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。
	。	。		。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。

女将はそれ以上何も言わず、利他の意思に後	「はい！」	いるね？」	確認するが利他よ、あなたは森の中が見えて	「史象の滝までは道標を用意しておいた。	に向かう覚悟を表しているように見える。	っていない右の拳が握られ、そこにある何か	利他は女将から視線を森へと移す。文具を持	「花弁を滝に・・・わかりました。」	投げ入れる「それだけだよ。」	い。行ってやることは一つだ。「花弁を滝に	「それは行って自分の目で確かめてくるとい	「史象の・・・滝？そこに何かあるんですか？」	の悩みを解消する手助けをしてくれるはずだ	ある。そこにある贈り物はきつと今のあなた	「史象（ししよう）の滝」という小さな滝が	「いいかい利他。この懐葉の森の奥にはね、	そつと手を前に差し出す。	「いえ、そんな・・・。」	「あなたにも礼を言いたい。」
----------------------	-------	-------	----------------------	---------------------	---------------------	----------------------	----------------------	-------------------	----------------	----------------------	----------------------	------------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	--------------	--------------	----------------

の	え	さ	し	明	上		ぬ	て	け	指	滝	て	り	に					と	の
間	て	ら	た	ら	を	し	声	い	こ	す	が	来	、	そ	森				振	全
を	く	に	岩	か	見	ば	も	た	れ	の	何	た	利	ち	入				り	て
抜	る	探	や	に	上	ら	、	た	。	が	な	を	他	ら	入				向	を
け	。空	索	足	霧	げ	ら	い	す	触	最	の	そ	は	へ	と				き	を
枝	間を	す	場	困	な	今	つ	。聞	れ	後	機	誘	そ	誘	森				も	委
を	区	と	が	気	が	ま	も	こ	。聞	の	会	う	れ	う	の				せ	ね
払	分	微	水	の	ら	で	の	え	こ	と	だ	い	に	よ	中				ず	た
う	け	か	辺	異	往	到	な	て	こ	い	と	く	こ	う	へ				森	。利
と	す	に	の	な	徨	達	る	く	こ	。こ	い	。目	れ	に	と				の	他
、	る	水	存	る	っ	し	誰	る	と	こ	と	指	ま	糸	消				大	は
目	か	が	在	空	て	た	か	る	。こ	だ	す	で	。何	が	え				き	く
の	の	落	を	間	い	こ	も	誰	の	け	史	。何	度	括	て				く	深
前	よ	ち	伝	が	。こ	の	わ	か	い	は	象	も	り	付	い				く	呼
に	う	る	え	現	。こ	場	か	ら	。こ	感	の	歩	け	け	。い				吸	を
小	な	音	、	れ	。こ	所	わ	。こ	。こ	じ	の	い	ら	ら	。い				を	す
さ	木	が	聞	。こ	。こ	を	。こ	。こ	。こ	。こ	。こ	。こ	。こ	。こ	。こ				。こ	。こ
な	々	こ	こ	。こ	。こ	。こ	。こ	。こ	。こ	。こ	。こ	。こ	。こ	。こ	。こ				。こ	。こ
川				。こ	。こ	。こ	。こ	。こ	。こ	。こ	。こ	。こ	。こ	。こ					。こ	。こ
が				。こ	。こ	。こ	。こ	。こ	。こ	。こ	。こ	。こ	。こ	。こ					。こ	。こ



流れる場所に辿り着いた。  
 （ここが・・史象の滝か？）  
 周囲をゆつくりと見回すと、同じ森でも違い  
 が目に見てとれた。今までも神経のように枝  
 葉を広げているように見える木は沢山あった  
 が、ここらに群生している木々はその生え方  
 に違いがある。奇妙に幹の部分から枝が伸び  
 それらが他の木の幹へと繋がり網目状になっ  
 ている。同じように神経にも見えるが、電線  
 やそれこそもっと細かい細胞同士の結合とも  
 例えられそうだった。  
 水があるからか少し湿度が高く感じ、滝を  
 探そうと踏みしめる足下の真新しい苔にも何  
 か意味があるのかと踏むのが躊躇われる。利  
 他は川の水の流れから上流の方向を見出し、  
 辺りを見渡すと対岸に見覚えのある糸がぶら  
 下がっていた。それからまたしばらく蛇行す  
 る川沿いを歩いていると、次は目の前に大き  
 な岩が見え、そこに埋め込まれた存在し得る  
 はずのない物に視線を奪われた。



